政尾藤吉伝補遺

香　川　孝　三*

タイのお雇い外国人として法整備に協力した政尾藤吉の生涯について、本国際協力論集８巻３号、９巻１・２号、３号、10巻１号に５回連載し、それを『政尾藤吉伝―法整備支援国際協力の先駆者』という本にまとめ、信山社から2002年６月に出版した。しかし、本として出版したが、まだ分からないことがあり、それらを追い続けてきた。不明の部分を補いたいという願いからである。できれば将来には、政尾藤吉が活躍したタイの人々にも知ってもらうために、英語かタイ語での出版を考え、不明の部分をできるかぎりなくしたいという願いを持っていたためである。その結果、政尾藤吉に関する資料をあらたに発見し、それらがある程度の分量となったので、それらを本論集に掲載することとした。

１．大阪のどの学校で学んだのか

藤吉は17歳のとき、故郷から家出に近い状況で、大阪にでて勉強をした。その学校がどこなのか不明である。大阪川口のミッション・スクールであることまでは分かっているが、どこなのか不明である。

この点について、関西学院史紀要11号（2005年３月発行）で、次のように述べている。

藤吉は関西学院神学部に１年在籍して、アメリカのヴァンダビルト大学に留学したので、卒業生ではないが、「シリーズ　関西学院の人びと」という欄で、藤吉を取り上げている。

「その宗派性を考えると、同志社出身で大阪教会牧師であった宮川経輝が1886年９月に北区中之島に創設した私立大阪泰西学館の可

＊　神戸大学大学院国際協力研究科教授（1994年４月～2007年３月まで）
神戸大学名誉教授
大阪女学院大学国際・英語学部教授

能性も捨てきれない（香川氏は、この学校の検討は十分にはされていない）」。「この学校は1887年８月頃、一時的に川口居留地21番地に移転し、1888年７月には川口を離れ、梅田に移転した」とある。ただ創設されたのは1885年９月という研究（井上琢智「大阪泰西学館小史―大阪における明治教育史の一駒」大阪商業大学論集67号、1983年12月）がある。１年違っている。ここでは、それは問わない。問題は藤吉が大阪にいる間の学校の所在地である。

宗派性というのは、創設者である宮川経輝は熊本バンドの出身であり、同志社の第１回の卒業生（1879年）であることから、アメリカの組合教会に属することを指している。藤吉はメゾジスト派の大洲教会で洗礼を受けており、同じアメリカのプロテスタント系の宗派に属するということでは、同じ宗派性といえよう。さらに、宮川は小崎弘道、海老名弾正とともに、日本組合基督教会の三元老と呼ばれているが、藤吉が洗礼を受けた大洲教会も、この教会のグループに入っていることからも、同じ宗派性を持つことは理解できる。

宮川は同志社卒業後、同志社女学校の教頭となっており、その仕事をやりつつ、1882年に大阪基督教会の牧師となって、布教活動にも従事した。その活動の一貫として大阪泰西学館を1886年９月設立し、宮川は妻の宮川次子とともに、経営にあたった。もともと、安藤乙三郎が自宅で私塾を開いていたが、それを学館に、提供されたものであった。普通科の５年制の学校として創設された。そこでは、英語、漢文、数学の３教科を教えていた。教科書として、マコーレーのヘースチング伝、クライブ伝、スイントンの万国史を用いていた[1]。しかし、経営は苦しく、そのために移転を繰り返したが、1898年に宮川は学校経営から手をひいた。宮川は梅花女学院にも校長としてかかわっており、梅花女学院は継続することができたが、泰西学館の経営はうまくいかなかった。

藤吉は1888年８月に大洲を離れ、大阪にやってきて、その年の11月には慶応義塾に入学しているので、３か月しか大阪にいなかったことになる。そうなると、藤吉が大阪に来たときは、大阪泰西学館は川口から梅田に移転したばかりのときである。「川口のミッション・スクール」に通っていたという記述があるが、大阪泰西学館は梅田に移転したばかりであったので、川口のミッション・スクールといっても、間違いとまでは言えないであろう。梅田に移転して校舎を新築中であったが、1888年８月30日に台風が大阪を襲い、建設中の校舎が一部倒壊している。1889年１月には校舎が完成するが、倒壊した校舎を見て、藤吉はこの泰西学館での授業に不安感を持ち、東京に出る決心をしたのかもしれない[2]。学生数は登録は300名近くであり、実際の授業出席者は100名を超えており、当時の私立学校としては規模の大きい方であったと思われる。しかし、その後校舎建設に伴う債務と学生数の減少で経営難に陥っている。

藤吉は川口の時計屋の２階に下宿していたので、もし、大阪泰西学館に通ったとすれば、

川口から歩いて梅田の学校に通ったものと思われる。当時は交通が発達していなかったので、徒歩で何キロも歩くのは普通であったであろうから、下宿から学校までは十分通学圏であったであろう。

大阪泰西学館の学籍簿に藤吉の名前が記載されていたのであろうか。これについては大阪泰西学館についての論文（茂義樹「泰西学館について」キリスト教史学36集、1982年12月）を書いている梅花女子大学の茂義樹氏に、論文を書く段階で問い合わせた。彼とはテニス仲間であり、私が同志社大学に勤務していたときには、何度もテニスで対戦した相手である。彼からは、どこにも藤吉の名前がないという連絡を受けた。卒業生の記録は残っているが、藤吉は卒業生でないので、記録がない[3]。当時の学籍簿が残っていれば、記録に残っている可能性はあるが、残っているのかどうかは分からない。

従って、いまだにどの学校に通ったかの記録は見出せない状況にある。

２．関西学院在籍中に住んでいた場所

１年ほど、藤吉は神戸で暮らし、関西学院神学部に在籍していた。関西学院学院史編纂室所蔵の「明治22年10月名簿」には、関西学院創設期の学生生徒名簿であるが、そこには氏名のみの記載で、住所が記載されていない。そこで、神戸のどこで住んでいたのか分からなかったが、関西学院史編纂室の協力で、住所が分かった。

１つは「関西学院史紀要11号」によって知ることができた。村上謙介・ウエンライト博士（Samuel Hayman Wainright）伝（教文館、1940年）によると、「政尾氏は、当時博士の家に寄寓してゐた青年で、稀に見る秀才であった。日本人教師は、英語の意味を把握しかねて、外人教師の援助を求めると云う様な事が、往々あるものであるが、政尾氏がパルモア学院に教えてゐた時代、なほ白面の一青年でありながら、一向その様な姿を見せなかった」という。

この記述から、藤吉はウエンライト博士の家に寄宿しており、パルモア学院で英語を教えていたことが分かった。そこで働いて学資を得ていたのであろう。先のウエンライト博士伝によれば、下山手２丁目の生田神社に程近いところに住居があったという。具体的な住所はないが、どのあたりに住んでいたかが判明した。

もう１つの資料は、関西学院史編纂室の比留井氏が見つけてくださった資料であるが、1936年発行の，A Special Edition of the Palmore Messenger の中で、ウエンライト博士が書いた文章の中に、Tokichi Masao lived in the upstairs of our house という記述が見つかった。その家には、メソジスト派の宣教師や関西学院で教えていた人々が共同で住んでいたのではないかと思われる。

政尾はそれまで広島にすんでおり、アメリカ留学のチャンスをつかむために、関西学院神学部に入学を果たした。しかし、その学資や生活費をどうするか問題であった。そこで政尾は同じ宗派であるメソジスト派の経営で

あるバルモア学院で英語を教えつつ、神学の勉強をしたものと思われる。そのためにJ. W. ランバスの助けを受けたものと思われる。そこで、広島から移ってきたときに、ウエンライト博士の家に住むことになったのではないかと想像される。バルモア学院は現在も存在しているが、そこから歩いて７－８分ぐらいの所に住んでいたことになる。関西学院のあった場所からは、徒歩で30分ぐらいのところであったであろう。

ウエンライト（1863年４月15日生れ、1950年12月７日死亡）は、1888年南メソジスト監督教会から派遣されて大分で布教活動に従事していた。1891年９月関西学院普通学部長となり、1906年まで関西学院で勤務した。藤吉が神戸に来たのは1890年８月か９月であるが、それから約１年間神戸に住んでいたので、それまでの間にウエンライトは大分から神戸に移ったことになろう。

「神戸栄光教会70年史」（1958年９月発行）によれば、1889年に認可を受けた関西学院は「原田の森」（旧原田村）にあり、現在は王子動物園の北側あたりに設置されていた。それより以前の1885年にアメリカ南メソジスト監督教会は日本での伝道を決定して、J.W. ランバスがその仕事を担当することになった。1886年９月17日に、南美以美神戸教会を創立した。のちに神戸以美教会と名称を変更した。美はメソジストを表し、以はエピスコパル、つまり監督を意味する。J. W. ランバスが赴任したのは、1886年11月24日であり、上海から移ってきた。居留地の47番地に居を構えた。ここは現在、大丸百貨店の東筋向かいにあたる。

着任後２日目に読書館を開いた。この読書館では、毎夜７時から９時まで開館して、聖書を読んだり、英語を勉強する場として設けられた。毎土曜日には講談や討論会が開催された。アメリカから牧師として移ってきたW. B. パルモアがこの読書館に興味を持ち、毎年100ドル寄付したいと申しでられ、毎年英書を寄贈されたので、1887年１月４日、これをパルモア学院（Palmore　Institute）と称した。

1888年８月、このパルモア学院は山手２番地に移った。ランバス一家は居留地をでて、ここに引っ越してきた。その後教会員が増えたので、教会は下山手通５丁目に、1888年10月に移した。パルモア学院は同年11月に、山手２番地から隣にうつし、昼間も学校を開くことになった。藤吉が広島から移ってきたときには、昼も夜も英語を中心として教える学校となっていた。

藤吉はメソジスト派の信徒として神戸栄光教会の礼拝に参列していたであろう。この教会は阪神淡路大震災で崩壊したが、その後立て直られて、兵庫県庁のすぐ前の場所に昔の姿を彷彿とさせる建物となって復活している[4]。

パルモア学院は、その後、神戸女子学校、ランバス伝道女学校、聖和大学となって発展していき、昭和23年11月にはパルモア病院が併設され、それが現在も続いている。メソジスト派は医療伝道を旨としていたので、病院

を併設したのはなんら不思議ではない。

３．政尾がバンコックで住んでいた場所

バンコックのどこに住んでいたのか。独身であったときの住居と、結婚して子供ができてからの住居がある。独身および結婚直後の時には、Thanon Phlapphla Chai に住んでいた。Phlapphla Chai 寺院の側である。この寺院は今も存在する。中国人街であるヤワラートの北側にあたる。ベルギーからのお雇い外国人ジョツランドの日記に、道路を挟んだ向かいに政尾夫妻がすんでいたという記述があることから判明した。

しかし、子供ができて、お手伝いさんを複数雇用しなければならなくなり、手狭になったために、引越しをした。その引越し先が不明である。住所の表記は Phlaplaj Road とわかっているが、それが現在どこにあるかが不明である。その住所はどの地図を見ても載っていない。その当時の新しくできた大通りである Thanon Charoen Krung の近くに引っ越したと思われるが、どこなのかつかめていない。このあたりには外国人が多く住んでいた。引越し先の方が日本公使館に近くなっていると思われる。

シャム協会の歴史部門の担当者に聞いたときに、その住所の名称はニックネームであって、正式には別の名前であろうという返事であった。３つほど候補をあげてくれたが、どこにも、政尾が住んでいた跡を見出すことができなかった。バンコックでは、道路の名称が変更する場合もあるし、愛称で呼ばれた道路が、今なんと呼ばれているか分からないのは、大変残念である。

４．タイ伝統法に関する博士論文の問題点

藤吉はタイ、当時はシャムと呼ばれた国の伝統法の論文で東京大学から２つ目の博士号を取得した。東京大学に保管されていた論文は東京大震災の際に、燃えてしまったために、その要旨が残っているにすぎない。

その要旨が、どのように後世の研究によってフォローされているか。それは石井米雄著・タイ近世史研究序説（岩波書店、1999年）の中でなされている。これが政尾の論文に対するはじめての論評である。その186頁以下で次のように述べている。

「タイの伝統法が、インド法の影響をうけて成立したという事実を、テキストに即して実証を試みた最初の学者は、政尾藤吉である。前世紀末、シャムの近代刑法典起草のため、法律顧問としてシャムに赴いた政尾は、1905年、バンコックの「シャム協会 The Siam Society」で講演を行い、今日、「三印法典」として伝承されているタイの伝統法典の内容を、つぎの５項目について「マヌ法典」と比較した。政尾は、まず「三印法典」の冒頭におかれた「プラタマサート Phra Thammassat」の原文を、「マヌ法典」と照合し、「訴訟の原因となる18の項目」が「マヌ法典」（Ⅷ、415）と「プラタマサート」のいずれにも見いだされる事実を指摘する。ついで「奴隷法 Laksana That」をとりあげ、同法に挙げられる奴隷の７種類と、「マヌ法典」（Ⅷ、415）のそれと

同一性を確認した。さらに「証言法 Laksana Phayan」に見える証人の非適格要件が、大筋において「マヌ法典」（Ⅷ、64―48）の記載に対応している事実を見出し、また「債務法 Laksana Kumi」のふたつの規定、すなわち、（１）利子は元金の額を超えてはならない、（２）偽って己の債務を否認するものには、債務額の二倍の罰金が課せられる、という規定が、それぞれ「マヌ法典」（Ⅷ、151，153および59）に存在している事実をつきとめた。政尾はこれらの対応に基づいて、タイの伝統法が、ヒンドウー法系（Hindu Law System）に属することが証明されたとした」。

石井は、政尾があげた５項目だけでは、タイの伝統法とインドの古代法との間の関係の証明としては十分でないという考えを示している。両者の間に、一致点とともに、不一致点も存在するからである。その事例として、「プラタマサート」と「三印法典」の双方に見出されるという「訴訟を提起せしめる18項目」についてみても、「プラタマサート」には、この他に「マヌ法典」にはない11項目が挙げられており、合計で29項目とされている。さらに、「三印法典」所収の「奴隷法」には、「マヌ法典」には見られない「使うべからざる６種の奴隷」が列挙されている。証人非適格者の要件についても、「証言法」には、「マヌ法典」に見える「ヴェーダの学習者」を欠き、後者にはない「五戒・八戒を守らぬ者」をあげている。特に、この最後の事例は、ダルマシャーストラを生んだバラモン教的枠組からの逸脱を示す徴表として注目されるとしている。

なぜそうなったのか。東南アジアでインドの影響を受けた国が成立したが、これは14世紀ごろには終了する。これはサンスクリット語を表現手段としていたので、「サンスクリット化」と呼ばれている。それに変わって、上座仏教はスリランカで発展し、それがシンハラ人によって、バーリ語を媒介として東南アジアに伝えられた。これは「シンハラ化」と呼ばれている。「サンスクリット化」と「シンハラ化」とは区別すべきものである。13世紀に国家の形成がなされたタイでは、「シンハラ化」した国であった。そこで、政尾論文の問題点は、「サンスクリット化」と「シンハラ化」を区別せず、「プラタサマート」を無媒介的に「マヌ法典」と結び付けようとした点にあったとした。

「プラタマサート」と「マヌ法典」の中間に、第三の法の介在が想定されるが、それには２つの説があって、アユタヤがビルマ人の支配下におかれた時、ビルマ人が「ダルマシャーストラ」をモデルとし、バーリ語ないし、ビルマ語で作成した dharm-masattham か、モン人がモン語またはバーリ語で表した「ダンマサッタン」を受け入れたものかの、どちらかであるという。後者はタイ人国家のアユタヤが、モンの文化的基層のうえに建設されたことを根拠としている。いずれも、インドからの直接の影響ではなく、途中に別の要素がはいりこんだ法典の影響を受けたことを指摘している。

これで政尾の論文の位置づけがはっきりし

て来たと言えよう。

５．タイでの綿花栽培の提唱

拙書の232ページに、藤吉がタイでの綿花栽培を提唱していることを記載しているが、それを裏付ける資料が見つかった。それは台湾日日新報1914年９月26．27日に掲載されている「有望なる暹国棉作業（上・下）」という文章である。これは新しく発見した文章である。神戸大学経済経営研究所が文献整理をした際に見つけた文献である。

日本で紡績業が盛んになるにしたがって、いかに綿花を輸入するかが問題となってきている。アメリカやインドから輸入しているが、紡績業では競争相手の国であり、そこから輸入することに安心できない。そこで、綿花を栽培できる場所としてタイが有望であること主張した。

藤吉は綿花栽培の要望をタイ国王に奏上したところ、１万ライ（1500－2000町歩ぐらい）の土地を国王から賜った。そこで試験的に綿花の栽培をおこなうために、日本政府に依頼し、農商務省農事試験場の技師が試作に着手した。その結果、タイは綿花の生産には適しているが、害虫が多いことが判明した。そのために、日本人で綿花栽培に乗り出す者が出なかった。

しかし、害虫の問題は駆除をきちんとやれば問題はないとしている。タイの農民に綿花の栽培を奨励したが、きちんと害虫駆除をすれば、よい結果がでてきている。農事試験場の実験的栽培は、それまで森林であったところを開墾して開いた場所でおこなったために、まわりの森林地帯から害虫が発生して、収穫が少なくなったにすぎないと判断できる。

栽培をしても、買う人がいなければならない。中国人の商売人が購入するが、中国人はタイの人を虐める。つまり買い叩くので、タイの農民は栽培をやめてしまう。大阪の綿花の団体から人が来て、三井物産のタイ支店の人といっしょになって購入したが、相当の値段で購入したので、タイの農民は大喜びであった。

今後タイでの綿花栽培をタイ人にまかせると、その発展を望めない。タイ人は類の怠惰者なので、タイ人に任せることはできない。日本人が企画経営すれば、日本にとっても、タイにとってもプラスになる。しかし、その障害となるのが、治外法権を有する外国人の取り扱いである。治外法権を有する外国人がタイに移住すれば、タイは迷惑を蒙る。綿花栽培を本格化する前に、治外法権を撤廃する必要がある。

政尾は、タイへの日本人の商業や工業面での進出を図るためには、治外法権を撤廃することを主張している。平等な条約を締結して、タイ人の名誉を図る必要があり、そうすれば、日本人がタイでさまざまな活動ができる場が拡大すると主張している。

６．シャム協会での活動

シャム協会は王室がスポンサーとなって設立された学術団体であるが、政尾はその創設のときに理事として活躍した。

シャム協会の100周年を記念して2004年に出版された本、The Siam Society : A Century（The Siam Society 発行）の中で、政尾について、13－４ページに紹介されている。

「当協会の最初の理事会のメンバーであった政尾藤吉は、当時政府の特別法律顧問であり、控訴裁判所の裁判官でもあった。後に彼はシャムの公使となり、1921年に死亡した。その火葬がワット・サケでおこなわれ、ラーマ６世が出席して、点火した。彼のこの国に対する情熱は、ヴァン・デー・ハイデが書いた『シャムの経済発展』の文章を読んでなされた議論の中で示されている。日本で働いたイギリス紳士の１人であるハリー・パークスが出席した天皇主催のパーティーでの出来事について政尾は述べた。政尾によれば、パークスは大胆にも、アジア大陸で、インドのこちら側で、人種的に非常に知能の発達した日本人とよく似ていて、そこから日本が学ぶことができる人々が住む小さな国がありますと天皇に申し述べた。その国がなにをしており、そこから日本がなにを学ぶことができるか知るために、天皇が喜んで人を送り込むことを希望しますと述べた。天皇は実際にシャムからなにを学ぶことができるか確かめるために高級な人物を送り込んだ。しかし、その当時バンコックには都市工学の技術者はおらず、不潔な町であった。従って、その高級な人物は、清潔さに対して宗教的といえるほどの関心を持って、バンコックの非衛生的条件にうんざりしていた。そして、天皇に好意的な報告はおこなわなかった」

パークスの話は政尾が伝聞でどこかで聞いて、シャム協会の会合の場で、述べたのであろうか。政尾がタイで仕事をおこなうに際して、パークスの天皇への示唆があったことを述べているが、権威づけのために述べたことであろうか。政尾が死亡して80年ちかくたっても、このような話が残っていたのは驚きである。日本の現在の皇太子もこのシャム協会を訪問した記録が残っているが、タイ王室の関係の深い協会なので、日本の天皇とかかわる話として、現在まで言い伝えとして残っていたのであろうか。

この本の中では政尾の顔写真と、特命全権公使としての信任状を国王に手渡したあとに取った記念写真が掲載されている。ラーマ５世（チュラロンコン王）が立てたチャクリー・マハー・プラサード宮殿の前でとった写真である。現在、この宮殿は王宮の中心部当たるに位置し、1882年バンコック王朝（ラタナコーシン王朝）9100年祭に完成された。宮殿の中央の玉座のある公式謁見の間とその両翼棟の３つの部分からなっている。玉座のある間では、国王が各国大使の信任状を授与する際に接見されたり、国賓を招いて公式の宴会をおこなう場所である。政尾もここで信任状を渡したり、公式の宴会に列席したものと思われる。この宮殿はいまも健在であり、多くの観光客が訪問する宮殿である。もちろん宮

殿の中までみることはできない。この宮殿には外国の君主からチュラロンコン王に贈られた品物が飾られているという。政尾が日本の美術品をチュラロンコン王に寄贈したことはわかっているが、それらはこの宮殿に飾られているのであろうか。

７．政尾の死亡記事

タイの英字新聞、Siam　Observer 1921年８月22日の記事の中に、政尾の葬式の予告を見つけることができた。以下の内容である。

THE REMAINS
OF
TOKICHI　MASAO
（His Imperial Japanese Majesty's
Envoy Extraordinary and
Minister Plenipotentiary）
will be cremated at Wat Saket
at ５ p.m.
Wednesday, 24th August, 1921
Bangkok, August 22th, 1921

葬式の様子は拙著に書いているので省略するが、ラーマ６世じきじきに火葬の点火をしており、タイで外国人の火葬で国王が点火した始めての事例であった[5]。

注

1　宮川経輝の伝記は、高橋虔・『宮川経輝』、比叡書房、80頁、1957年

2　茂義樹「泰西学館について」キリスト教史学36号、1982年、５頁

3　大阪泰西学館には内村鑑三が不敬事件後、教頭として1892年９月から1893年５月まで勤務していた。その後熊本洋学校に転任した。卒業生の中には、小説家の岩野泡鳴や敬天牧童こと野田良治がいる。野田は1875年11月10日、丹波国何鹿郡に生まれ、大阪泰西学館を経て、東京専門学校に学び、1897年公使館および領事館書記生試験に合格し、外務省に入省した。マニラ、メキシコ、ペルー、チリ、ブラジルなどで勤務した。1935年退官した。南米に関する本を出版すると同時に、詩人として詩集も出版している。日葡辞典（有斐閣、1963年）を編纂している、ユニークな外交官として活躍した。田崎公司「泰西学館に関する一考察―谷岡学園・大阪商業大学120年の地下水脈」大阪商業大学商業史博物館紀要３号、2002年12月参照。この野田良治の長男が、東京大学法学部でフランス法と比較法を担当した野田良之教授である。野田教授には私の初期の論文である「インドのストライキ権」を読んでいただいたことがある。当時、アジア法を研究する者は少なく、比較法の観点から、関心を持っていただいたことは、研究の励みとなった。

4　政尾藤吉伝の出版後、出版された神戸栄光教会百年史1886－1986年（神戸栄光教会百年史編集委員会編、2005年９月11日発行）を参照。

5　2007年３月バンコックでの調査中に、次の文献が政尾藤吉のことにふれているのを発見した。Tamara Loos, Subject Siam-Family, Law, and Colonial Modernity in Thailand, Silkworm Books, 2006

Life History of Dr. Tokichi Masao : An Addendum

KAGAWA Kozo*

Abstract

I have written articles on Life History of Dr. Tokichi Masao at Journal of International Cooperation Studies vol. 8, no. 3, vol. 9 no. 1 & 2, vol. 10 no. 1. Under these articles I have published a book on Dr. Tokichi Masao at Shinzansha in June 2002. After the publication, I continued to collect materials on Dr. Tokichi Masao because I could not find his life history completely. I will comment new materials.

1 Where had he studied in Osaka ?

He studied at mission school of Kawaguchi in Osaka when he was 17 years old. But the school is not found yet. According to Journal of Kansei Gakuin vol. 11 published in March 2005, there is a possibility that this school is Osaka Taisei Gakkan established by Mr. Keiteru Miyagawa. Mr. Miyagawa was a priest of Osaka church after the graduation from Doshisha. Dr. Masao accepted baptism at Methodist Church at Ozu. Osaka Taisei Gakkan was also Protestant church. So Dr. Masao would go to this school. But I could not find evidences that he went to this school. I asked Prof. Shigeru of Baika Women University to check school records. He answered he could not find his name at the school records.

2 Place of residence in Kobe

I could find his place of residence when he had studied at Kansei Gakuin. He stayed at Mr. Wainright's residence near Ikuta shrine. Mr. Samuel Hayman Wainright wrote that Tokichi Masao lived in the upstairs of his house as a special guest of the Palmore messenger. Masao taught English at Palmore Institute.

* Professor, Graduate School of International Cooperation Studies, Kobe University. (1994. 4～2007. 3)
Emeritus Professor, Kobe University.
Professor, Department of International & English Interdisciplinary Studies, Osaka Jogakuin College.

3 Place of residence in Bangkok

When he was a bachelor, he lived at Thanon Phlapphla Chai. But he moved to Phlapaj Road after he had three children. But I could not find Phlaplaj Road. This name is a nickname according to an historian at Siam Society. So I could not find real name of the road although I tried to look for the place of residence when I went to Bangkok.

4 Problems of Doctor thesis

Masao was the first researcher to find that Thai traditional laws were influenced by Indian traditional laws. And he mentioned that Thai traditional laws belonged to Hindu law system. But Prof. Yoneo Ishii found that there were not enough evidences to show the relationship between Manu Code and Three Seals Code.

5 Other activities

I could find his paper to recommend cotton cultivation in Thailand at Taiwan Daily Newspaper on 26 and 27 September, 1914. Masao's activities were mentioned at a memorial book on Siam Society published in 2004. Masao is remembered in Thailand even now.